

紅葉先生逝去前十五分間

明治三十六年十二月

明治三十六年十月三十日十一時……、形勢不穩なり、予は二階に行きて、謹みて鄰室に畏まれり。此處には、石橋、丸岡、久我の三氏あり。人々は耳より耳に、耳より耳に、鈍き、弱き、稲妻の如き囁を傳へ居れり。

病室は唯寂として些のものの音もなし。時々時計の軋る聲とゝもに、すゝり泣の聞ゆるあるのみ。

室と室とを隔てたる四枚の襖、其の一端、北の方のみ細目に開けたる間より、五分措き、三分措きに、白衣、色新しき看護婦、悄然として出で、静に、しかれども、ふら／＼と、水の如き燈の中を過ぎりては、廊下に行める醫師と相見て私語す。

雨頻たり。

正まさに十分ぶん、醫師いしは衝つと入りて、眉まゆに憂い苦くを湛たへつゝ、もはや、カンフルの注射ちゅうしゃ無用むようなる由よしを説とき聞きかせり。

風かぜ又また一層そうを加くはふ。

雨あめはたゞ波なみの漾たぐよふが如ごとき氣勢けはひして降ふりしきる。

これよりさき、病室びやうしつに幽かすかなるしはぶきの聲こゑあるだに、其その都度つど、皆みな慄然りつぜんとして魂たましひを消けしたるが、今いまや、偏ひんに吐息といきといへども聞きえずなりぬ。

時ときに看護婦かんごふは襖ふすまより半身はんしんを顯あらはして、ソト醫師いしに目めくばせ爲せり、同時どうじに相携あひたづさへて病室びやうしつに入りて見みえずなれり。

石橋氏いしばしは椅子いすに凭よりて、身みを堪たへ支さふること能あたはざるものゝ如ごとく、且かつ仰あふぎ、且かつ俯ふし、左ひだりを見み、右みぎを見みて、心地死こゝちしなんとするものゝ如ごとくなりき。

( 角田氏つのだし入いる。 )

人々の囁きは漸く繁く濃かに成り來れり、月の入、  
引汐、といふ聲、閃き聞えつ。  
十一時十五分、予は病室の事を語る能はず。